

語構成と語彙との関わり

齋藤倫明*

目次

1. はじめに
 2. 語構成論と語彙論との位置づけ
 3. 語とは何かー語の多様性ー
 4. 造語法と造語力ー語種別・位相別ー
 5. 語構成と意味
 6. おわりに
-

1. はじめに

語構成と語彙との関わりについて、本論では以下の4点から論じることとする。

- (1)語構成論と語彙論との位置づけ
- (2)語とは何か
- (3)造語法と造語力
- (4)語構成と意味

このうち、(1)は本論の基本的な立場についての論であり、全体の前提となる。(2)以下は各論で、(2)は語構成論と語彙論とに共通する基本的単位「語」をめぐる問題、(3)は語構成論特有のテーマである「造語法と造語力」が、語種、あるいは位相語とどのように関わるかという問題、(4)は語構成論で扱う意味の多様性をめぐる問題である。

* 東北大学大学院文学研究科教授

2. 語構成論と語彙論との位置づけ

この問題については、既に齋藤(2002)で述べたので、基本的にはそちらを参照していただきたい。

2.1 語彙論の位置づけと語構成論の位置

この点に関しては、次の2点がポイントとなる。

- (a) 言語の構造をどう考えるか。
- (b) 上記(a)との関わりで、言語の研究分野をどう設定するか。

このうち、(a)に関しては、本論では、基本的に、言語の構造を言語単位の結合という観点から捉える立場に立つ。すなわち、より具体的には、以下の図1に示すように、言語というのを、より小さい単位からより大きな単位が構成されることによって成り立つ構造体と考えるわけである。

[図1] 言語単位から見た言語の構造 (下線を引いたのが言語単位)



次に(b)であるが、言語構造を大きく図1のように捉えるならば、それぞれの単位に関して、それがより大きな単位を構成する際に、

- (i) どういった種類の単位が存在するのか
- (ii) それらがどのような結合上の規則によってお互いに結び付き、どのような単位を新たに構成するのか

といった点が問題になるわけであり、それがすなわち研究分野として成立する。このような観点から研究分野を設定すると、次の図2のようになろう。

[図2] 言語単位との関わりで見た研究分野(線で囲んだのが研究分野)

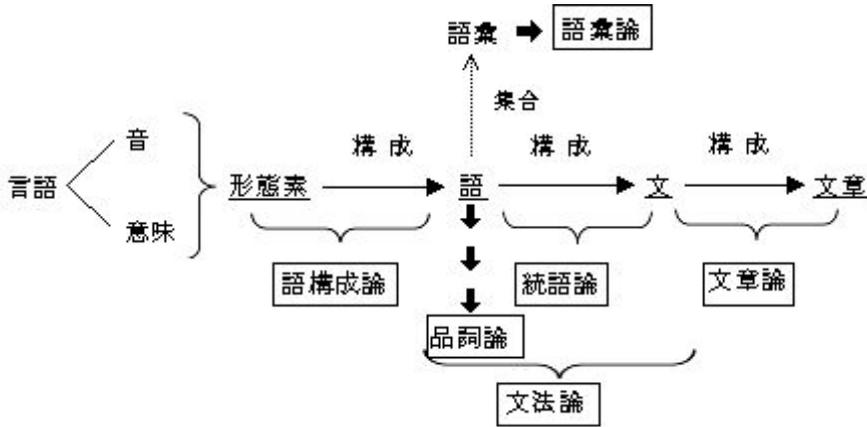


図2からわかるように、語彙論とは、語の集合である語彙を対象として分析・研究する研究分野であり、語構成論とは、語が形態素(本論では、以下「語構成要素」と呼ぶ)によってどのように構成されるかを研究する研究分野であるということになる。

2.2 語彙論的な語構成論と文法論的な語構成論

図2を見るとわかるように、語という単位は語彙論と文法論との接点に位置するが、このことは、視点を変えて言うならば、語には語彙的な側面と文法的な側面との二面が存在し、前者が語彙論に、後者が文法論に専ら関わるといふことに他ならない。

一方、語を構成する単位である語構成要素の方にも、語の有する二側面に対応する二側面が存在すると考えられる。というのは、鈴木(1996)や宮島(1994)が主張するように、語構成要素は語に従属する単位であるからである。そこで、今、それをそれぞれ「意味的側面」(語の語彙的な側面に対応)、「機能的側面」(語の文法的な側面に対応)と呼ぶならば、一般に「語構成」と言う時、そこには次の二つの面が存在することになる。

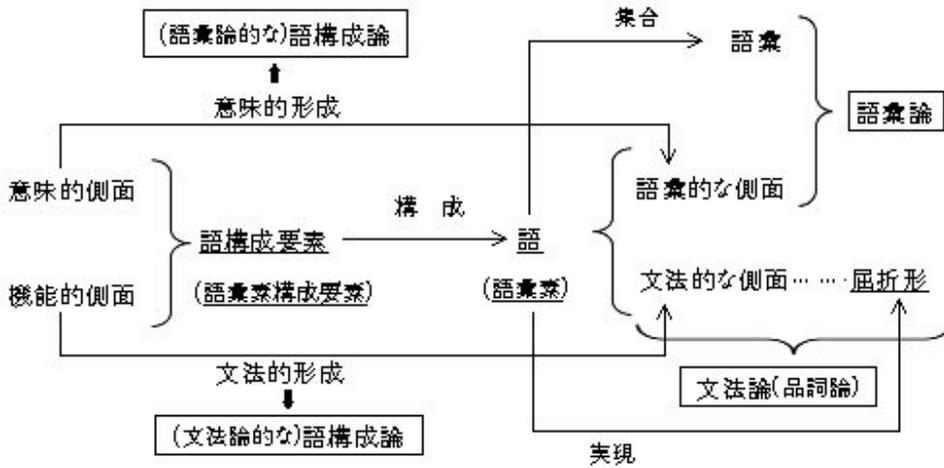
- ┌ 語の語彙的な側面が語構成要素の意味的側面によってどのように構成されるのか
- └ 語の文法的な側面が語構成要素の機能的側面によってどのように構成されるのか

このうち、前者を主に扱うのを「語彙論的な語構成論」、後者を主に扱うのを「文法論的な語構成論」と呼び分けることができよう。

以上のように考えるならば、語構成論と語彙論・文法論との関係は、次の図3のように示す

ことができる。

[図 3] 語構成論と語彙論・文法論

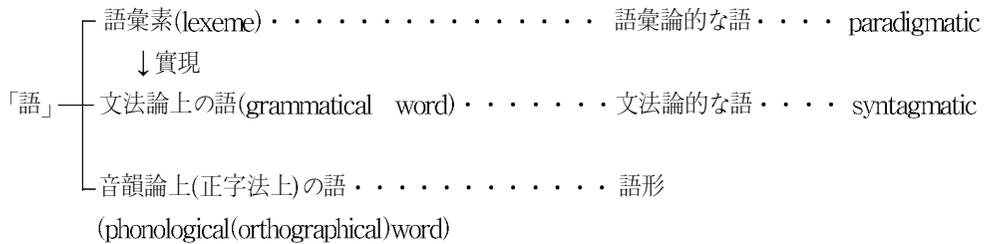


3. 語とは何か—語の多様性—

3.1 語の多義性

言語学の世界ではよく知られていることであるが(Lyons [1968・1970] 等参照)、「語 (word)」という用語は多義的であり、次の図 4 に示すように、少なくとも、本来区別すべき3種類の意味で一般には使用される。

[図 4] 「語」の多義性



このうち、「語彙素」というのは、辞書の見出し語に相当するものであり、「文法論上の語」というのは、実際に文中において使用されているものとしての語である。後者は、前者が具体的

な環境において「実現された」(realized)ものと捉えることができる。たとえば、「見る」という語(＝語彙素)が、「きのう友だちと映画を見た。」「テレビを見ながらご飯を食べた。」「もっとしっかり見ろ。」「怖い夢を見て目が覚めた。」等の下線部の語(＝文法論上の語)として実際の環境下で実現される、というようである。そういう点では、文法論的な語はsyntagmaticな存在であり、語彙素はparadigmaticな存在であると言えよう。また、前者は専ら統語論で扱う対象であるという意味で「文法論的な語」であり、後者は語彙論で扱う対象であるという意味で「語彙論的な語」である。なお、品詞論は両方の語を扱う。品詞分類すべき対象は語彙素であるが、活用は文法論的な語の問題だからである。また、語構成論の対象は基本的に語彙素であるという点を理解しておくことが重要である。

一方、「音韻論上の語」というのは、いわゆる語形の問題として扱われることが多い。例えば、日本語では似た場面で見られる同形の語(「科学・化学」「市立・私立」「私案・試案」)が多いので、読み方で区別する(「かがく・ばけがく」「いちりつ・わたくしりつ」「わたくしのあん・こころみのあん」)などという場合のいわゆる「同音語」という問題はその例である。なお、日本語には「正字法(正書法)」が確立していないが、「明日」(あした・あす・みょうにち)、「大家」(おおや・たいか・たいけ)といった同音語に対する「同形語」という問題が存在する点注目される。

3.2 計量語彙論と語

3.2.1 語の水準

語彙論の一分野である計量語彙論においても語という存在をいろいろと問題にするが、その中に、語の数え方に基づく語の区別というのがある。すなわち、語の数え方に、同じ語が何回出て来てもその度に一語として数えていく数え方と、同じ語は何回出て来ても一語としてしか数えない数え方とがあり、前者に基づく語数を「延べ語数」、後者に基づく語数を「異なり語数」というが、それによって語を以下のように二分するというのである(伊藤 [2002] 参照)。

{ 単位語(token)→延べ語数という際に数えられた語
 { 見出し語(type)→異なり語数という際に数えている語

このうち、見出し語はほぼ語彙素に相当すると考えてよいと思われるが、単位語は必ずしも文法論上の語とは言えない。なぜなら、文法論上の語という観点から見た場合に同じ語と見られるものが複数回出て来ても、単位語の観点からはその度毎にカウントされるからである。もちろん、音韻論上(正字法上)の語でもない。すなわち、この区別は語の同一性に關わるか否かという

観点からの分類であり(関わるのが見出し語、関わらないのが単位語)、上記3.1で述べた分類とは本質的に別の観点による分類なのである。

3.2.2 調査単位

計量語彙論における語の問題には、語彙論から見た場合、上で述べたのとはまた別の問題がある。それは調査単位に関わる問題である。

よく知られているように、語彙調査における調査単位にはさまざまなものがある。これらは調査目的によって使い分けられるべきものと言われているが、特に長い漢語を処理する際などにその違いが際立ってくる。そこで、今、たとえば、国立國語研究所によって行なわれた語彙調査において使用された調査単位の幾つかを、「国立國語研究所言語計量研究部」という漢語をどう区切るかという点から対照してみると次の図5のようになる(林大 [1982] 583頁参照)。

【図5】 語彙調査における種々の調査単位と長い漢語の処理の仕方

- M単位……国立・國語・研究・所・言語・計量・研究・部
- β単位(短単位)……国立・國語・研究・所・言語・計量・研究・部
- 長単位……国立國語研究所・言語計量研究部
- W単位……国立國語研究所・言語計量研究部
- α₀単位……国立・國語・研究所・言語・計量・研究部
- α単位…… 国立・國語研究所・言語研究計量部

このうち、M・β・長・W単位は単語に、α₀・α単位は文節に近い単位だとされる。それぞれの調査単位には、それなりの存在意義と設定根拠があるわけであるが、そもそも調査単位と語とが必ずしも一致しないというのはどういうことであろうか。調査単位というのは語彙量を量るためのものであり、語彙の元は語(=語彙素)であるはずだから、本来、両者は一致するはずのものである。従って、それが一致しないということは、語彙調査における「語彙」と語彙論で言うところの「語彙」とが必ずしも同質のものではない、ということに他ならず、そのことの有する意味は非常に大きいと思われるが、残念ながら現状ではこの問題について充分議論されているとは言えない。

4. 造語法と造語力—語種別・位相別—

4.1 語種と造語力

一般に漢語は造語力が強く、和語・外來語は造語力が弱いと言われる。このことは、語種と造語力との間に一定の相関関係が見られるということの意味するが、それはどこまで本當だと言えるのだろうか。確かに漢語の造語力が強いことはその通りである。それは様々な点に現われるが、その一つとして長い漢語の存在を挙げることができる。たとえば、玉村(1984、45頁)には「厚生化学研究費補助金新薬開発研究費」(17字)という語が挙げられているし、齋賀(1959)では「積雪寒冷地帯義務設置学校屋内運動場急速整備促進期成会」(26字)という長大な漢語が紹介されている。筆者も、最近、「国際高等研究教育機構設置構想検討委員会専門委員会」(24字)という長い漢語を目にした。

一方、和語や外來語の造語力についてはどうだろうか。まず和語についてであるが、この点については、筆者は既に一度述べたことがある(齋藤 [1992])ので、そちらを参照していただきたいが、結論的に言えば、漢語に比べ和語の造語力が落ちることは否定できないが、和語にもそれなりの造語力があると見る事ができる、ということになる。この点は、具体的には、オノマトペ(「ぎとぎと」「ゼロゼロ」etc.)、疑似複合語(「核の傘」「草の根」etc.)、「～する」(「愛聴する」「キープする」etc.)、「～な」(「クリーミーな」「ピーチな」etc.)といった語、あるいは造語方法を見ればわかるであろう。ただし、後の二つは、厳密には和語というよりも和語を含む混種語の例と言えよう。

外來語についても同様のことが言える。この点について詳しくは石野(1992)を参照していただきたいが、外來語の造語力が最近高まって来ていることについては、和製英語の増加、省略、およびそれによる造語力の確保という点などが注目に値するとされている。具体的には、たとえば、後者の場合、「バイオテクノロジー」(9拍)→「バイオ」(3拍)：「バイオ食品・バイオ農業・バイオ医薬品・バイオ化粧品」、「セクシュアル・ハラスメント」(11拍)→「セクハラ」(4拍)：「セクハラ裁判・セクハラ対策・セクハラ被害・セクハラ防止委員会」といったケースなどが挙げられるであろうということである。

4.2 位相と造語法

位相語は、基本的に共通の機能(連帯機能・隠蔽機能)に支えられて存在するものであるが、位相(語)の性格により、どういった機能・目的が強くなるかは微妙に異なってくる。そして、それが造語法にも反映されると考えられる。たとえば、米川(1997)には、若者言葉の造語法とし

て、2類15種のパターンが挙げられているが、同書によれば、若者言葉の有する機能は、「娯楽機能・会話促進機能・連帯機能・イメージ伝達機能・隠蔽機能・緩衝機能・浄化機能」の7種類であり、その中でも娯楽機能と会話促進機能が中心的であるというが、そういった面が特に強く出ている造語法として同書が指摘するのは以下のものである。

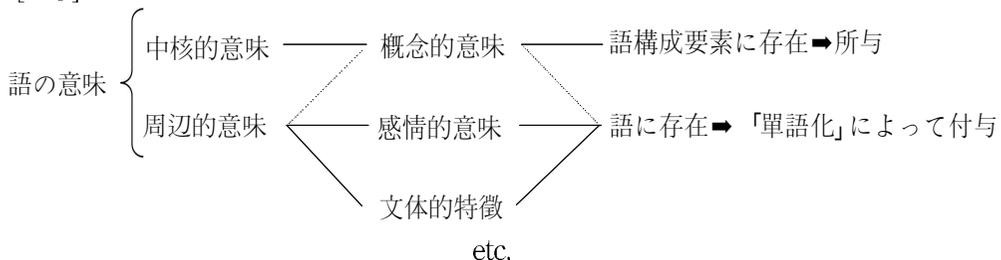
- ・借用(ex. 「アメリカン」 [= 頭髪の薄いこと(人)])
- ・言い換え(ex. 「ホワイトキック」 [= 「しらける」こと。駄洒落による])
- ・もじり(ex. 「キムタコ」 [= 木村拓哉を真似しているが全然似ていない男])
- ・語呂合わせ(ex. 「わけわかめ」 [= 「譯が分からない」ということ])
- ・混交(ex. 「あひるごはん」 [= 朝ご飯+ 昼ご飯])

5. 語構成と意味

5.1 意味の種類と語構成への関与の仕方の相違

この点については、齋藤(2004)で詳しく論じたので省略するが、以下に結論的な図だけを挙げておく(図中「単語化」は筆者の用語である。詳しくは同書を参照されたい)。

[図6]



5.2 多義性のレベル差

この点についても、齋藤(2004)で詳しく論じたので省略する。要は、語構成との関わりから多義性を見た場合、多義性に以下の3種類が区別されるということである。

- ┌ 語構成要素レベルでのみ成立する多義性
- ├ 語構成要素レベルから語レベルへと引き継がれる多義性
- └ 語レベルでのみ成立する多義性

5.3 百科事典的知識と特質構造

最近の文法論的な語形成論がよく利用する概念装置に「特質構造」(Qualia Structure)がある。例えば、影山(1999)は、複合名詞や動作主名詞の有する意味、あるいは動詞の名詞化によって生じる意味などを特質構造の観点から分析・記述しているが、こういった分析がどこまで有効であるのか、一度原理的に考えてみる必要があるだろう。そして、その際に吉村(2003)の次のような指摘は傾聴に値するものであると筆者には思われる。

まず、生成語彙論は、語の意味を言語的意味と捉え、非単一階層的アプローチから規定している。つまり、「本」という名詞の意味を考えるのであって、「本」が指す事物に関するいわゆる非言語的知識(イメージ連想を含む)を意味に含めない。しかしながら、事実上、クオリア役割で表される知識の多くは経験的に動機づけられた知識であるので、言語的意味を越えた百科事典的知識を含んだものと見なすのが妥当であろう。第2に、事物の役割指定、すなわち意味づけは、本来、数え上げ可能な閉じた知識の集合(クオリア構造)ではなく、開いた性質のものだということである。例えば、「銀行」が暑い時期の「涼みどころ」であったり(目的役割)、「本」に「枕代わり」の働き(構成的役割)を見出すことは、臨時的であるにせよ、可能なクオリアであろう(230頁)。

なお、この問題は、本質的には、文法論的な立場に立つ研究と語彙論的な立場に立つ研究との対立の問題であると考えられる、という点を付け加えておく。

6. おわりに

語構成の研究は語彙論の中で確固たる一分野を占めている(2.2で見たように、文法論的な側面もある)が、語構成という問題自体は、いわゆる語構成論の中ばかりでなく、語彙論の様々な分野と深く関わっている。そのことを自覚しながら語構成の研究を進めていくことが語構成論にとっても語彙論にとってもプラスになると思われる。本論文は、そういった考えの下、そのため前提と具体的な問題の幾つかを扱ったものである。

【參考文獻】

- 石野博史 (1992) 「外來語の造語力」『日本語學』11-5、明治書院
- 伊藤雅光 (2002) 『計量言語學入門』大修館書店
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 齋賀秀夫 (1959) 「語の結合の長さ—総合雑誌における二字の漢語の場合」『国立國語研究所論集 1 ことばの研究』秀英出版
- 齋藤倫明 (1992) 「和語の造語力」『日本語學』11-5、明治書院
- (2002) 「語構成要素・語・語彙—語彙論と語構成論—」『日本語學』21-5、明治書院
- (2004) 『語彙論的語構成論』ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1996) 「構文論における形態素主義について」『形態論・序説』むぎ書房
- 林大 (1982) 『図説日本語 グラフで見ることばの姿』角川書店
- 宮島達夫 (1994) 「單語の本質と現象」『語彙論研究』むぎ書房
- 吉村公宏 (2003) 「認知語彙論」吉村公宏編『シリーズ認知言語學入門2 認知音韻・形態論』大修館書店
- 米川明彦 (1997) 『若者ことば辭典』東京堂出版
- Lyons, John(1968) *An Introduction to Theoretical Linguistics*. (國弘哲弥監修他譯『理論言語學』大修館書店、1973年)
- Lyons, John(1970) *New Horizons in Linguistics*. (田中春美監譯『現代の言語學』大修館書店、1973年)

住 所：日本仙台市泉區將監3-6-7

電 話：+81-22-375-0085

e-mail：rmsaito@attglobal.net

[謝辭] 本論文は、2005年10月29日(土)に韓國忠南大學校で開催された「韓國日本文化學會 2005年度秋季國際學術大會」で行なった講演を文字化したものである。このような機会を与えて下さった韓國日本文化學會、および關係諸先生方に深く感謝申し上げる。